

〔翻訳〕

スポーツ史の「新たな方向」をめぐる
クリスティアーネ・アイゼンベルクと
ミヒャエル・クリューガーによる誌上論争

有賀 郁敏*

【訳者解説】

本稿はドイツの学術誌、『スポーツと社会——スポーツ社会学，スポーツ哲学，スポーツ経済学，スポーツ史のための学術誌』（Sport und Gesellschaft—Zeitschrift für Sportsoziologie, Sportphilosophie, Sportökonomie, Sportgeschichte）創刊号（2004年）に掲載されたクリスティアーネ・アイゼンベルク（Christiane Eisenberg）ならびにミヒャエル・クリューガー（Michael Krüger）の論文の翻訳である。それぞれの論文のタイトルは以下のとおりである。

- ・クリスティアーネ・アイゼンベルク「スポーツ史における社会学，経済学そして『文化経済学』のアプローチ——新しい研究方向のための提言」（Soziologie, Ökonomie und “Cultural Economics” in der Sportgeschichte. Plädoyer für eine Neuorientierung, S. 73-83）（第1論文）
- ・ミヒャエル・クリューガー「ドイツスポーツ史の発展に向けた10の命題——クリスティアーネ・アイゼンベルク「スポーツ史における社会学，経済学そして『文化経済学』のアプローチ——新しい研究方向のための提言」に対するコメント」（Zehn Thesen zur Entwicklung der deutschen Sportgeschichte. Anmerkungen zu Christiane Eisenberg: Soziologie, Ökonomie und “Cultural Economics” in der Sportgeschichte. Plädoyer für eine Neuorientierung, S. 84-91）（第2論文）
- ・クリスティアーネ・アイゼンベルク「スポーツ史の対象範囲と政治的目標設定——ミヒャエル・クリューガーの『コメント』に対するコメント」（Gegenstandsbereich und politische Zielsetzung des Sportgeschichte. Anmerkungen zu Michael Krügers “Anmerkungen”, S. 92-95）（第3論文）

著者のアイゼンベルクとクリューガーに関しては、以前、本誌（『立命館産業社会論集』第44巻，第4号，2009年ならびに同45巻，第4号，2010年）において2人の別の論文を翻訳した際に簡単に紹介しているのでここでは省略したい。

さて，論文のタイトルが示しているように，2人の著者は誌上論争を繰り広げている。それもそのはずで，上記の3論文は本学術誌では「論争」として位置づけられている。ドイツにおけるこの種の学術誌において論争，討論，批評が掲載されることは決してめずらしいことではない。しかし，問題

* 立命館大学産業社会学部教授

提起—批判と反論—再反論といった形式で、論争の当事者が同じ学術誌しかも同じ号の中で論争を展開する事例を私は目にした記憶がない。しかも冒頭でも紹介したように本学術誌の創刊号である。ちなみに創刊号には編者による創刊の辞を除いて6つの論文が掲載されており、その半分が2人の論争に割り当てられている。

上記の理由の一端を創刊の辞に書かれている編集方針から読み取ることができる。本学術誌はスポーツ（の社会）科学の発展を目指す観点から、相互に関連する2つのアプローチを重視している。一つはスポーツ（社会）科学を構成する部分領域間の共同ないし連携である。本学術誌の副題、「スポーツ社会学、スポーツ哲学、スポーツ経済学、スポーツ史のための学術誌」は、端的にこの点を示している。しかしそれ以上に、第2に本学術誌はスポーツ（社会）科学と社会科学を架橋し相互に連携していくことも目指されており、しかもそれ（架橋と連携）は単なる比較や参照といった程度のものではなく、厳しい相互批判を媒介することが謳われている。『スポーツと社会』という雑誌名には、こうした編者らの期待あるいは意思が込められているのである。なお、この編集方針は創刊時の20名の学術委員会の構成（専門分野）でも裏づけられている。いわゆるスポーツ科学分野の委員は5名のみであり、その他の委員は社会学、教育学、哲学、民俗学、歴史学、政治学など多様な専門分野に属している（アイゼンベルクもその一人である）。

クリスティアーネ・アイゼンベルクが第1論文の中で着目しているポイントは、近代スポーツの競技特性としての競争を媒介にしたスポーツの商業化過程あるいはスポーツビジネスの歴史的展開であり、近代スポーツに表出された歴史実態と特質をスポーツの対象相関的な把握を通じて分析するよう提唱している。このようなアプローチは、産業化や国家の政治などの外因的要因からスポーツの歴史的な性格を浮き彫りにしようとしてきた従前のスポーツ史研究とは異なる新たな方向であり、個々の消費のみならずスポーツクラブ、連盟、地域そして国家を巻き込みながらグローバルに展開するスポーツの商業化のメカニズムを把握し、スポーツ固有な力動性を評価できる点に著者は研究の優位性を置いている。そもそもドイツのスポーツ史研究がこのような対象相関的なアプローチに無頓着であった理由として、親学問たる歴史学の無批判な受容と従属関係があるとアイゼンベルクは診断しており、それゆえ本論文におけるドイツのスポーツ史研究者に対する氏の評価は手厳しい。もっとも、著者の論文を注意深く読めば自ずと理解できるように、アイゼンベルクはスポーツの内部世界のみを研究対象にせよと提言しているわけではない。氏が指摘するスポーツ史研究の新たな方向は4つの複合的テーマから構成されており、「スポーツと国家」「スポーツクラブと社会関係」「メディアとスポーツ」「スポーツと他の商品文化」といった視点に示されているように、スポーツを社会、市場、国家、グローバル世界と関連づけて捉えようとしている点で、いわゆるトリヴィアルなスポーツの種目史、ルール史、技術史とは位相を異にしている。

それに対して、ミヒャエル・クリューガーは、第2論文においてドイツにおけるスポーツ史研究者の立場からアイゼンベルクの提言に対し強い違和感を抱く。クリューガーはスポーツの対象相関的な把握に対して、たとえば第三帝国のスポーツ連盟役員による戦後の正当化要求に見られた「スポーツの独自世界」というイデオロギーの危うさを対置する。氏の指摘の力点は、この文脈ではスポーツの政治的純潔性に潜むイデオロギー的性格の暴露にあり、近代スポーツの商業化、経済化の歴史的な諸相をスポーツの対象相関的な視点から考察しようとするアイゼンベルクの視点とは幾分ずれが生じている。しかし、この段階ではスポーツの歴史的展開を社会や経済などとの位相でどのように評価し、叙述すべきかといった点で、論争における共通の土俵が形成されている。

ところがクリューガーは、そこにとどまらずドイツにおける体育・スポーツ史研究の学問的伝統と今日的展開へと話題を発展させていく。クリューガーは、このような研究史上の成果や苦悩、あるいは多様な場や主体によって取り組まれている今日のスポーツ史研究の実態を顧みようとしな

ンベルクの分析手法にこそ、批判を集中すべきだと判断したのであろう。そして、ここに至ってアイゼンベルク論文との論理的な関連性や結節点が見えにくくなってしまった印象は否めない。アイゼンベルクが第3論文の中で、「2人の執筆者間の意思疎通が混乱している。彼らは相互にすれ違っているといた印象を読者に与えてしまう」と危惧した点と重なる。学問的論争の作法からすれば、提示された論理や命題の軸心に対する批判こそが要請されるのであり、クリューガー論文がこうした要請に十全に答えていないというアイゼンベルクの指摘はそのとおりである。しかし、アイゼンベルクがスポーツ史の「新しい方向」としてスポーツ社会学、スポーツ経済学との学際的な領域、すなわち「文化経済学（あるいはスポーツの経済学）」を重視するのであれば、たとえば文化（スポーツ）消費に孕まれる、ある種の文化的ヘゲモニーのありようも視野に入れるべきである。これは対象相関的な視点から政治的制約下のスポーツ固有（内在的）な「力動性」を考慮したとしても、否、考慮するがゆえに重要な論点となりうる。スポーツ固有な「力動性」と支配層による文化的ヘゲモニーとの関係、あるいはそれと反対に「力動性」を底辺で支えている民衆の文化的ヘゲモニーに対する抵抗や逸脱の契機を見逃してはならない。アイゼンベルクがスポーツ社会学との結節も視野に入れている以上、このような論点は重要であるし、おそらく両者の「論争」もより生産的な内容となったに違いない。

この点と関連して、ドイツにおける体育・スポーツ史研究の伝統や今日的展開に関するクリューガーの評価は的確にして傾聴に値する。なぜならば、これらの伝統や取り組みの中にスポーツ史研究の「新たな方向」を構想するための題材や論点が存在している可能性があるからであり、たとえば氏が第2論文で紹介した旧東ドイツのスポーツ展開を経済的な視点をも用いて考察したタイヒラーらの研究は、アイゼンベルクの「新しい方向」との対話が十分期待できるだろう。

アイゼンベルクが提起した「新しい方向」は、スポーツ史研究にとって未知の領域といえる事柄も少なくない。それは、スポーツ経済学やスポーツの商業化に傾斜しているように見えながら、スポーツと社会の関係把握といった点でスポーツ史研究者が常に重視してきた問題と結節する。クリューガーは第2論文の末尾に「スポーツのダイナミズムは、政治そして経済だけで解明することはできない。ダイナミズムはさまざまな条件とプロセスの相互依存のなかで、はじめて明らかにできるのである」と記しているが、この当然ともいべき命題はアイゼンベルクの「新しい方向」と必ずしも矛盾するものではないと私は考える。なぜならばスポーツの対象相関的考察は、スポーツのダイナミズムの相互依存的な考察の前提にも結果にもなりうるからである。その意味でも2人の論争の精神を継承発展させなくてはならない。

私は『スポーツと社会』誌が日本で紹介される以前の2006年9月、ミュンスター大学の研究室で著者の一人であるミヒャエル・クリューガー教授から3つの論文を手渡された。氏の行為の趣旨は定かでないが、いつかこの論争の感想を私から聞いてみたいと思っていたにちがいない。すでに4年近くが経過しまった今、ようやく翻訳という形で日本の読者に論争を紹介できるようになった。2人の論争は、ドイツのみならず日本においても課題として位置づけられ、深められなくてはならないものであると確信している。

最後に、本論文の日本語への翻訳と本誌への掲載を快諾して下さった、クリスティアーネ・アイゼンベルク教授とミヒャエル・クリューガー教授に対し、心から感謝申し上げたい。